

## 入学式理事長祝辞 2019年（平成31年度）

学校法人東京理科大学を代表しまして、お祝いを述べさせていただきます。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。東京理科大学の創立以来、過去最多となる60,593人もの志願者のなかから合格を勝ち取り、この日を迎えられることは、皆さんの努力の賜物です。また、ご列席のご父母の皆さまにおかれましては、お子様が無事、難関を突破し、本日ここに入学式を迎えられましたこと、さぞお喜びのこととお祝い申し上げます。

さて、本日は、これから修学や探究の道を志す皆さんに、有意義な大学生活を送るうえでの心得を申し上げたいと思います。それは、“大学への入学は、それ自体が目的ではなく、将来の目標を達成するための手段であり、あくまで通過点である”ということです。

皆さんの中には、所期の希望の道には進めず、気持ちの整理ができていないままこの日を迎えている方もおられるかもしれません。しかし、私は皆さんに問いたいと思います。「あなたの本当の人生の目標、目的は何ですか」と。“大学に入る”は人生の目的ではないはずです。

先程、松本学長の式辞がありました。私からは、ほぼ半世紀前に私が理科大に入学した際、当時の菊池正士学長にお話しいただいた内容が、今も強く心に残っておりますので、ここでご紹介したいと思います。

“大学は「学ぶことを学ぶ」場であり、上滑りをして多くのことを覚えるのではなく、4年間で基礎をしっかりと築くこと。一生懸命勉強して基礎を突きつめ、とことん納得するまでやってみること。その学問体系を本当に自分の知識の血となり肉となるまで理解することで学びの喜びが得られるのです。

基礎のしっかりとした人というのは、自分で物を考えることのできる人であり、社会の進歩にとって欠くことのできない独創性というのは、そのような人たちから出てくるのです。

また、課外活動、社会活動等も諸君の人間形成上欠くことのできぬ大きな要素です。諸君は、今、一生の中で二度とこない最も重要な時期を迎えているので、この学園生活を大切にほしい。”とのお話しでした。

菊池学長の言葉にもあるように、大学は、学問をすることが目的です。そして、学問をするそのもっと先には、将来の夢、ありたい姿、希望があります。すなわち、大学に入学することは、将来の夢をかなえるための手段に過ぎないのです。

目的と手段の取り違えがよくあります。希望した大学や会社に入れなかったからと、絶望的になるのは、手段を目的と見誤っているからです。希望通りの大学に入学した皆さんも決して驕ることなく、やはり、大学や大学院は通過点に過ぎないという気持ちを持って、自分の将来の夢、成し遂げたいこと、人生で何が重要であるかということを見つけてください。

これらを踏まえ、今日は、皆さんが、これから大学生活を送るにあたり心掛けて欲しい3つのことについてお話しします。

まず一つ目は、先ほどの菊池学長の言葉にもあったように、“兎にも角にも一生懸命勉強する”ことです。将来の夢を叶えられるか否かは、これからの4年間、或いはその先の大学院で、どのような学生生活を過ごすかにかかっています。皆さんの入学した東京理科大学には、明治14年の創立以来の“実力主義”の伝統があります。

“実力主義”とは何か。学生時代にしっかりと力を付けた者だけを卒業させると定義していますが、これは21名の創立者たちが、自ら教壇に立ち、自分たちの学んだ理学を教育することで、国の発展を支える若者を育てようと真剣勝負をしてきた歴史に裏付けされたものだと思っています。

私の学生時代を振り返ってみても、この大学にはまさに、“一生懸命勉強する環境”がありました。進級するためには「関門科目」と言われる科目をクリアしなければならず、皆苦勞して勉強しました。勉強することが当たり前だという雰囲気は大学にありました。そしてその伝統は今も連綿と受け継がれています。

皆さんにとって、大学に通う日々は、心身共に解放され、気力にあふれ、人生で一番自由な時期となるでしょう。皆さんの大切な時期を預かる我々教職員は、皆さんに対し、また社会に対し、重大な責任を感じています。大学を学問修得の場にふさわしい環境に保ち、たえず質的向上に努めて、自分を磨く場になるよう、努力を惜しまず励むことを約束します。

二つ目は、専門の学問に偏らず、教養を身に付けてほしいということです。

最近、海外においては、研究者は当然として、企業経営者においても、多くがドクター、マスター等の学位を所持しています。本学においても、多くの学生が修士課程に進学し、博士課程への進学者も年々増加しており、本学の卒業生が専門知識でひけを取ることはないかと思えます。

しかし、グローバル化、ボーダレス化が叫ばれている現代において、日本のビジネスリーダーに“科学の知見を踏まえた教養”の不足が指摘されています。

では、なぜ教養が必要なのか。それは、身についた教養が、人生においてわくわくすること、面白いことや楽しいことを増やすためのツールだからです。様々なことを知り、世界に視野が広がり、人生が面白くなる。自ら考え、納得のいく答えを出し、より良い社会をつくるために行動に移す。教養は、このように皆さんが社会で生きていくための指針となってくれます。

東京理科大学に入学した皆さんには、是非、世界レベルの教養人に成長してもらいたいと思います。

三つ目は、高校時代までの How to の勉強から卒業し、常に Why、なぜなのか、また What、物事の本質は何なのか。Why と What を意識して自身で考え、物事に向き合ってもらいたいということです。

授業に出て知識を蓄えることで満足せず、学んだ領域について疑問を持ち、問いかける姿勢を持ち、自分で考える。幸い東京理科大学には、ゼミ、実験、実習等を通じて、課題発掘、課題発見、課題解決の能力を養う機会が用意されて

います。是非、皆さんも大学入学後は、なぜなのか、何なのかという意識をもって真理の探究に取り組んでもらいたいと思います。

最後になりますが、皆さんには、大学で学ぶ機会を得られた幸運を無駄にせず、最大限に、活用してもらいたいと思います。

大学という場では、自分で動かなければ何も始まりません。これから始まる大学生活を、有意義なものにできるか否かは、皆さんの行動次第です。豊富な教養と科学の専門知識を兼ね備え、将来、社会を牽引される皆さんにとって、大学時代に身に付けた知識、課外活動等を通じて得た友人、その他、学生時代の経験の全てが、皆さんの糧となり、将来にわたる自身の拠りどころとなります。

皆さんが健康に留意され、今日の想いを忘れることなく、有意義な学生生活を過ごされることを祈念して、私の祝辞といたします。

本日は誠におめでとうございます。

2019年4月9日  
学校法人 東京理科大学  
理事長 本山 和夫